

# 観光地「屋久島」イメージの 変化について

Changes in the Promotional Images of Yakushima Island  
as a Tourist Site

柴崎茂光

SHIBASAKI Shigemitsu

はじめに

①観光地「屋久島」の概要

②観光地イメージの変遷に関する先行研究

③雑誌「旅」における観光地「屋久島」の扱い

④雑誌「るるぶ」における観光地「屋久島」の扱い

おわりに

## 【論文要旨】

本報告では、観光雑誌・ガイドブックとして知られている「旅」や「るるぶ」の文字情報や写真情報を活用しながら、1993年に世界自然遺産に登録された屋久島の観光イメージの変遷を明らかにした。その結果、時代ごとに観光地「屋久島」のイメージが変化してきたことが明らかとなった。1950年代には秘境としての屋久島が強調され、山域よりも里の暮らしなどが観光資源と表現されていた。国立公園に編入された時期を除いて、1980年代までは里の温泉や滝が主要な観光資源として頻繁に写真などにも掲載された。しかし1990年代以降になり、世界遺産登録も一つの契機となり、観光イメージの中心が、縄文杉や白谷雲水峡といった山域に移行した。とりわけ近年は、エコツーリズムを活用した新たな観光形態が紹介されるようになる。例えば、太鼓岩やウィルソン株のハート形の空洞などに代表される新しい観光資源が誕生し、観光地「屋久島」イメージの変化にも影響を与えていた。

こうした観光地のイメージ変化をもたらす要因として、観光発展の初期の段階では、観光地へのアクセスが大きく影響しているものと考察された。そして飛行場といった交通機関や道路環境や木道といった登山道整備が改善される中で、アクセスが容易となり、山岳記事が少しずつ増えていったと考えられる。山岳記事が増える中で、大衆観光地化やエコツーリズム産業の発展も進み、観光雑誌・ガイドブックの出版社側も新たな情報の更新を繰り返してきた。ただしこうした迅速な観光資源化は、コンフリクトを生み出してきた。持続的な観光発展のために、行政側が提供する観光情報を検討する時期に来ている。

【キーワード】 世界遺産、価値、メディア、観光開発、不可逆性、エコツーリズム

## はじめに

国立公園に代表される保護地域は、国家などの登録・認定機関が価値付けした上で切り取った空間であるが、同時に表象空間として、その時代の文化を映し出すものといえる<sup>(1)</sup>。

こうした表象空間を創出する主体としては、公的機関だけでなく、観光業界やメディアが果たす役割を無視することができない。

実際に日本における保護地域の歴史をみても、時代ごとに観光地を巡る様々なブームが発生してきた。

明治末期から昭和初期にかけては、国立公園（1934年指定開始）制度の設立を設ける請願が出され、候補地が選定されるようになると、各地で盛んに誘致活動が行われた<sup>(2)</sup>。実際に国立公園に指定されなくとも、「候補地」というだけで観光地の価値が上がり、「候補地」の名前がついたパンフレットやチラシも発行された（写真1）。保護地域に対する関心の高まりは、「国立公園」だけでなく、大阪毎日新聞社や東京日日新聞社が呼びかけた、「日本八景」でも同様にみられた。さらに同年、植民地だった台湾でも台湾八景の投票呼びかけが日本八景と同様なスタイルで行われ、3億6,000万票もの投票があった<sup>(3)</sup>。

第二次世界大戦後になっても、地方自治体や観光業者などから、国立公園に対する要望が出され、国立公園の指定によるブランド力の強化を地域振興につなげようとする動きが続いた<sup>(4)</sup>。日本が復興期を迎え、庶民も旅行に出かけるだけの余裕が生まれる中で、様々な観光ブームが発生した。代表的なものをあげるならば、

宮崎の新婚旅行ブーム（1960年代後半から1970年代後半<sup>(5)</sup>）、沖縄返還直後の最果てブーム（与論島、1970年代から1980年代前半<sup>(6)</sup>）などがあげられる。さらに1980年代半ば以降はバブル経済期に入り、1987年の総合保養地域整備法（リゾート法）の施行により、様々なテーマパークやゴルフ場が誕生することになる。1990年代以降になると、日本国内における保護地域への関心が高まることになる。とりわけ、世界遺産条約（日本国は1992年に締結）に基づいて、1993年から登録が始まった世界遺産制度の影響を無視することはできない。1996年からTBS系列が放映を開始したテレビ番組である「世界遺産」などといったマスメディアの影響によって、世界遺産のブランド力が増し、そ



写真1 国立公園候補地天橋立案内  
（観光パンフレット 1929年）

注：日本三景として知られる天橋立であるが、1952年に特別名勝（国指定）、1956年に若狭湾国定公園に指定され、国定公園に関しては2007年に丹後天橋立大江山国定公園と改称された。

の後の世界遺産ブームが生じた。<sup>(8)</sup>近年になると、「生物圏保存地域」<sup>(9)</sup>、「ジオパーク」、「日本遺産」など様々な保護地域の登録・指定・認定が続いている。

保護地域ブームによって、富士山や屋久島などの一部の観光地では、エコツーリズム産業の発展や、山ガールの出現といった新たな観光スタイルが誕生することになる。その一方で、し尿処理や混雑感に代表されるといった過剰利用問題や遭難事故の増加といったリスクマネジメント上の問題が発生してきた。<sup>(10)</sup>

ただし、観光ブームが起きるということは、ブームが終焉を迎えると、その反動として観光地が忘れ去られた存在となることを意味する。全国展開する旅行代理店にとっては、ある観光地のブームが過ぎ去れば、別の観光ブームが起きている場所をプロモーションすれば経営上の損失は生じない。しかしながら、地域社会という視点でみると、ブーム終了後には観光生産額（売上高）が減少し、長期的には休業・廃業を余儀なくされる観光事業体が急増する。公的機関が観光施設の設置に関与した場合には財政悪化し、財政再建団体となる可能性も高まる。実際、かつての観光ブームの際に建設された宿泊施設やアミューズメント施設が閉鎖され、現在も野外に放置されているものもある。<sup>(11)</sup>

こうした状況を考えると、その時代ごとに観光地イメージに変化を確認し、その時代ごとの観光形態や管理のあり方との関係性を考えることは、当該地域の持続的な観光開発に向けて必要なことといえる。

そこで本稿では、観光地のイメージが経年的にどのような変化を遂げてきたのかという点について、観光雑誌・ガイドブックの記事を分析したうえで、メディアが及ぼす影響を考慮した管理のあり方を考察することを目的とする。分析の対象として、1993年12月に白神山地と併せて日本ではじめて世界自然遺産に登録され、その後に観光客が急増した鹿児島県屋久島を対象とする。屋久島をとりあげる理由であるが、世界自然遺産だけでなく、国立公園、生物圏保護地域など、種々の保護地域の登録・指定が行われてきた中で、観光地としての「価値」が大きく変容している可能性が潜み、またこうした変化が起きた場合に、利用と保全上のコンフリクトを生み出す可能性があるからである。本稿における分析の枠組みであるが、時系列的なイメージ変遷を追う必要があるため、長期にわたって発行された観光雑誌・ガイドブックとして「旅」「るるぶ」シリーズにおける「屋久島」記事を取りあげた。文章だけでなく、被写体の地理的特徴、写真・絵の中で表象される観光形態を明らかにした上で、こうした観光形態の変化が管理体系に及ぼす影響を考察する。

保護地域の定義についても述べておきたい。一般的には、「生物多様性及び自然資源や関連した文化的資源の長期的な保全を目的として、法的もしくは他の効果的手法によって、一般にも認識され、管理されている地理的空間」<sup>(12)</sup>などと定義される。しかし本稿では、来訪者の視点から広義に位置づける。具体的には、「生物多様性及び自然資源や関連した文化的資源の長期的な保全もしくは観光振興を目的として、法的もしくはその他の効果的手法によって、一般にも広く認識される地理的空間」を保護地域と定義する。したがって、日本三景や日本八景のように、法的な規制は具体的にかかっていなくとも、広く人々に「素晴らしい自然や生態系が存在する空間」として認識されているものも保護地域に含まれることになる。

## ①……………観光地「屋久島」の概要

本論に入る前に、簡単に屋久島について紹介しておく（図1）。

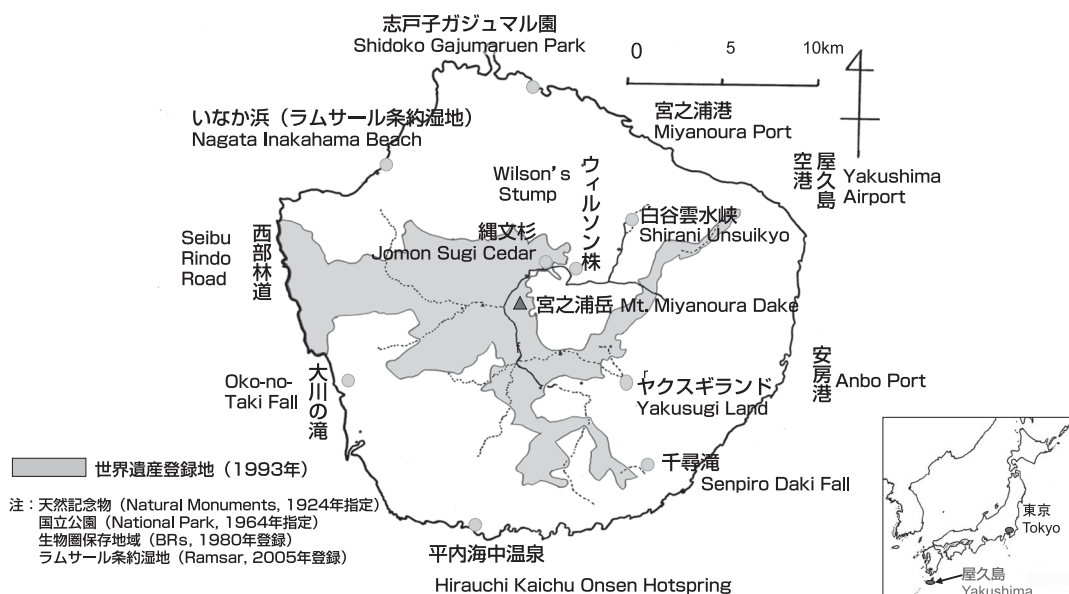


図1 屋久島の概況<sup>(13)</sup>

屋久島は鹿児島港から約135km南に位置する、面積が約505km<sup>2</sup>の円形の島である。島の地形は一般的に急峻で、中央部には九州最高峰（標高1,936m）の宮之浦岳に代表される峰々が並び、島民には奥岳と呼ばれ信仰の対象となってきた。豊富な雨量によって標高600mから1,800mの山中には杉が天然更新する。樹齢700から800年を優に超えるごつごつした形の杉の巨樹は屋久杉と呼ばれ、とりわけ屋久杉の代表格である縄文杉を一目みようとして、1990年代終わりから多くの観光客が往復10時間の道のりをかけて歩くようになった。なおこうした縄文杉や白谷雲水峡といった山域への入山者増加には、2000年以降エコツーリズム産業の発展が大きく関係していることは確かであり、売上高は2001～2002年時点で5億円を超えていた。<sup>(14)</sup> 屋久島のエコツーリズム利用者の特徴だが、20～30代の首都圏から飛行機を利用する女性客が中心的な客層で、登山経験が乏しい人が多い。<sup>(15)</sup><sup>(16)</sup>

屋久島の山域を中心に、様々な保護地域が登録・指定・認定・選定など行われてきた。近代的な保護地域制度の誕生は、1922年に学術参考保護林の設定に始まり、その後、1925年の国の天然記念物指定へとつながった。第二次世界大戦後には、1964年に霧島屋久国立公園に編入される形で国立公園として指定され、1975年に花山地区が原生自然環境保全地域に指定された。国際的な保護地域に関しても種々の指定がなされている。1980年には花山地区を中心に生物圏保存地域に、1993年に世界自然遺産に、2005年に屋久島北部のいなか浜がラムサール条約湿地に登録されてきた。



なお屋久島の自然環境は手つかずではなく、とりわけ近世以降はスギに代表される木材資源を直接・間接的に利用する形で、森と人との持続的なかわりがみられる。中でも1910年代から1970年まで山中に森林軌道が敷設され、山中に小杉谷・石塚といった林業集落が形成された。1970年に小杉谷製品事業所が閉鎖され、林業集落は消失したものの、一部の森林軌道は水力発電所の維持管理のために今もなお利用されている。<sup>(17)</sup> 現役で森林軌道が利用されていることも評価され、2009年に安房苗畑～荒川口間は経済産業省より近代化産業遺産に認定されている。

## ②……………観光地イメージの変遷に関する先行研究

海外の先行研究では、絵葉書、観光ガイドブック、観光客が撮影した写真などを用いて、観光イメージが創出されるプロセスや、実際の景観変化に関する研究が盛んに行われてきた。<sup>(18)</sup> とりわけ絵葉書を用いて、観光地のイメージ創出の過程を明らかにした研究が試みは多く存在する。例えば、世界自然遺産にも登録されているグランドキャニオンについては、1936年から1955年にかけて発行された絵葉書をもとに分析を行った研究がある。具体的には、絵葉書として利用された写真の撮影場所や構図を明らかにした上で、写真の色彩を加工することでよりウィルダネスを強調したり、自然の中に動物を挿入させてシンボル化を図るといった発行者側の意向が反映され、それが観光地のイメージ創出に大きな影響を与えていることを明らかにしている。<sup>(19)</sup> また観光地のイメージだけでなく、絵葉書などにえがかれた景観が現在と大きく異なることを指摘する研究も存在する。<sup>(20)</sup>

国内を対象とした先行研究として、前近代の絵図、観光ガイドブックなども紹介しながら、温泉地の近代化の過程を紹介した事例や、<sup>(21)</sup> 修験の場として栄えてきた熊野の事例を紹介した研究もある。<sup>(22)</sup> 第二次世界大戦後以降のイメージ変遷に関する研究としては、旅行雑誌を用いて、用いられた用語やキーワードから表象のあり方を推定する研究がある。雑誌「旅」などを対象として研究としては、日本全体における「温泉地」や「町並み観光地」の出現頻度や、記述されたフレーズを数量化III類で分類を行った上で、実際の事業や観光発展の経緯を紹介しているものがある。<sup>(23)(24)</sup> また原始的と紹介されてきた観光地「与論島」が、1960年代終わりごろから専門家の調査を経てサンゴ礁の青い海が中心的に紹介されるようになり、また夜遊という地域の風習から恋愛として紹介されるようになる中で、若者を中心とした観光客が急激に押し寄せ、最終的には性の解放の場として、風紀が乱れるなど現地とコンフリクトが生じた研究もある。<sup>(25)</sup>

また雑誌「るるぶ」シリーズを用いた研究もいくつかある。例えば、「るるぶ富士山」の目次に登場する単語の頻度や単語間の対応分析を行った上で、2008年頃までは登山情報誌的な内容が中心だったのが、次第にB級グルメや世界遺産といった内容も含まれるようになってきたことを指摘する研究もある。<sup>(26)</sup> なお雑誌「るるぶ」シリーズの場合には、特定の観光地について、毎年もしくは数年おきに更新しているものが多い。更新される情報を、写真もふくめてみていくことで、観光イメージに関する詳細な変遷を明らかにすることが可能だと考えられるが、こうした試みはまだ乏しい。そこで次章以降では、雑誌「旅」や「るるぶ」シリーズから、屋久島記事を抽出し、そこから観光地「屋久島」のイメージの時代ごとの変遷を明らかにする。

## ③……………雑誌「旅」における観光地「屋久島」の扱い

### 3-1 雑誌「旅」の特徴

雑誌「旅」は、1924（大正13）年4月に日本旅行文化協会（当時）が創刊した月刊誌で、2004（平成16）年に休刊となった。<sup>(27)</sup>雑誌「旅」は、日本で最古の旅行雑誌で、「旅行趣味の普及・観光施設の改善・旅行道徳の鼓吹をモットーに、旅行文化の向上を目的として発刊された専門誌」<sup>(28)</sup>であり、「近代的なツーリズムの発展のために寄与するという、啓蒙色のつよい編集方針」<sup>(29)</sup>が発刊当初に込められていた。戦後期に入っても、観光地やアクティビティを列記するのではなく、観光地を取り巻く歴史的・社会的背景を踏まえた上で、地元の人々との交流や郷土料理や新しい観光スタイルを紹介するなど、観光地の旅行文化の発展を目指す姿勢は貫かれていた。<sup>(30)</sup>雑誌「旅」では紀行文に代表される文字資料だけでなく、写真やイラストも頻繁に使用して、読者の視覚に訴えながら現地の旅情を伝えている点も大きな特徴といえる。

### 3-2 雑誌「旅」についての定量的な分析

表1は、雑誌「旅」において掲載された屋久島に関する時代ごとの記事数、累計ページ数、記事当たりのページ数を示している。1924年に創刊された雑誌「旅」であるが、初めて観光地として屋久島が紹介されたのは1950年代だが、1記事あたりのページ数が2.5ページと少なかった。1960年代から1970年代にかけては、記事数と累計ページ数が30～40ページ程に増加したが、1980年代になると記事数、累計ページ数ともに、1950年代と同じ水準まで落ち込んだ。本格的に記事数や累計ページ数が増加したのは、1990年代以降であった。とりわけ2000年から2004年の休刊前の4年間には、21もの記事が計89ページの紙面を使って紹介された。

観光ガイドブックの場合、写真やイラストも多用されており、こうした情報を定量化することで、観光地「屋久島」イメージの変化を明らかにすることもできる。図2は、記事中に用いられた写真の枚数を撮影場所で分類したものである。これをみると、1950年代、1970年代、1980年代にかけては里・海で撮影している写真が多く採用されていた。例外的に1960年代は、山岳地域の写真が多く利用されていたが、実数ベースでみると1980年代までは、用いられる写真の数自体が40点にも満たなかった。

表1 雑誌「旅」における屋久島関連の記事数・ページ数<sup>(31)</sup>

	記事数	累計ページ数	1記事あたりのページ数
1940年代以前	0	0	—
1950年代	4	10	2.5
1960年代	7	28	4.0
1970年代	12	38	3.2
1980年代	4	7	1.8
1990年代前半	4	25	6.3
1990年代後半	9	42	4.7
2000年～2004年	21	89	4.2
合計	61	239	3.9

こうした傾向に顕著な変化がみられたのが1990年代だった。写真数は急増し、山岳地域で撮影したものが、里・海よりも多くなっていることがわかる。2000年から2004年については、割合こそ里・海の方が山岳地域よりも高くなっているものの、実数ベースでいえば山岳地域を対象とした記事は80件といずれの時代よりも多かった。

次に、写真に人が含まれる(有人)、含まれない(無人)という視点から写真を分類した(図3)。観光地「屋久島」のイメージの中心が自然環境である場合には、有人ではなく無人の写真がより頻繁に登場すると推測されたからである。1950年代から60年代までは、有人と無人の写真の数がほぼ拮抗するもしくは有人の写真が多く掲載された。しかし1970年代になると有人よりも無人の写真が多く登場することになった。写真の点数自体が急増する1990年代以降になると、有人よりも無人の写真が用いられる割合が6割を超えるようになった。

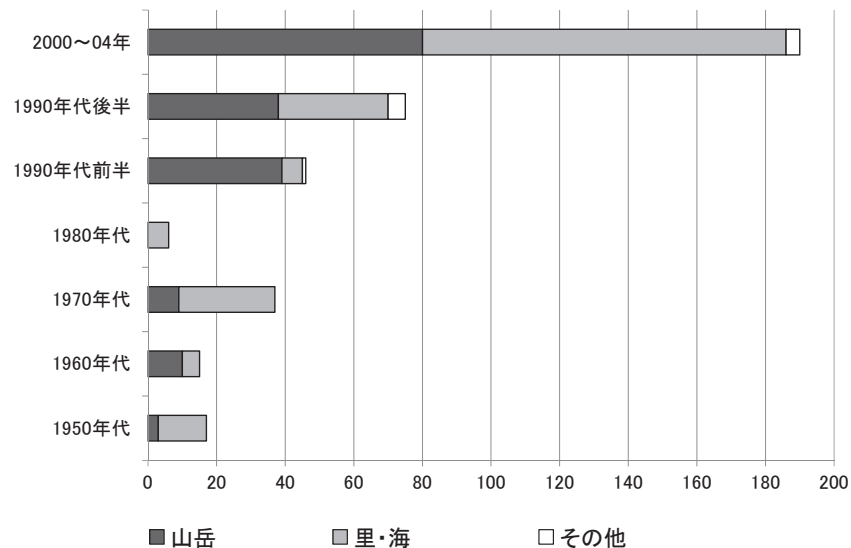


図2 雑誌「旅」で掲載された「屋久島」記事で用いられた撮影場所の写真点数<sup>(32)</sup>

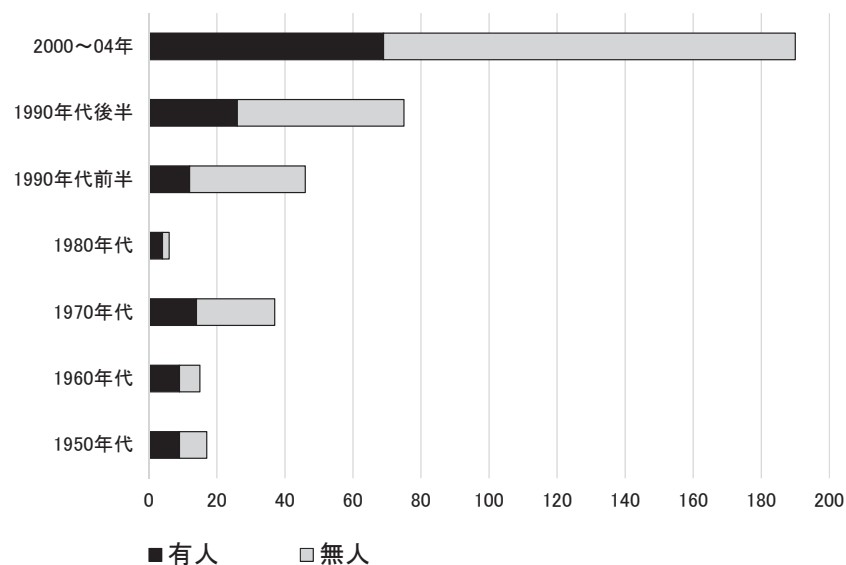


図3 時代ごとにみた有人・無人別の写真点数<sup>(33)</sup>

### 3-3 雑誌「旅」についての定性的な分析

前述した定量分析によって大まかな傾向がみえてきたものの、時代ごとの特徴を詳しく把握するためには、記述を読み解く作業も必要となる。

屋久島を初めて紹介した記事は、1952年に掲載された瀬戸内海、五島列島、屋久島などを計39日間で旅行の様子や現地の印象を、俳句も交えながら綴った4ページの紀行文だった。この中で、「屋久島の特異色は未開の一事につきる。屋久の島は約二万の島民、約二万の鹿と、数知れぬ猿によって占領されている。港湾も旅館も道路ものり物もすべて原始に近い<sup>(34)</sup>」と書かれていた。国内最南端(当時)に位置し、特異な自然環境が広がる中で、経済開発が遅れている「秘境の離島」として屋久島を描写しており、観光地「屋久島」になるためには港湾整備が必要だと述べられていた。

翌1953年10月号には、写真を中心した特集グラフ「孤島をさぐる」で屋久島が紹介された。用いられた写真は全部で6カットだが、山岳地域で撮影された写真は1カットもなく、安房川河口付近で丸木船に乗る青年の姿、里山景観と平木屋根の家屋、棒踊りを踊る様子、子供らの集まっている様子、木に登って遊ぶ島の子供たち、バナナの木の前に立つ女性など、いずれも島民の暮らしに焦点が当てられていた。本文を読むと、「椰子の葉陰で踊る盆踊りは、内地の風情とはちがつて、まことに勇ましい<sup>(35)</sup>」という言葉に象徴されるように、異国の文化を眺めているかのような描写が続く。ただし、漁労に使われていた丸木舟を「内地ならボート遊びというところであろうが、手作りのカヌー<sup>(36)</sup>」と描写したり、ガジュマルの木に登る子供らに対して「島の子供たちは、玩具をいじる楽しみを知らない」と記述するなど、現代の感覚では、差別的な表現とみなされる可能性が高い記述もいくつか含まれていた。このほかに、山岳地域に関する詳細な記事は、著名な登山家などによる紀行文に限られた<sup>(37)</sup>。

1964年3月に屋久島の約4割にあたる18,961haが霧島国立公園に編入され、霧島屋久国立公園と改称されるなど<sup>(38)</sup>、1960年代に入ると屋久島の山域が次第に知られるようになる。さらに1966年5月には、大岩杉(現在の縄文杉)が発見され、翌1967年1月1日の南日本新聞紙上に縄文杉の写真が大きく掲載された<sup>(39)</sup>。雑誌「旅」においても、1963年に山岳地域のグラビア特集が初めて組まれた<sup>(40)</sup>。二人組(男女)が屋久島の山域に入り、栗生歩道を登る様子や残雪を渡るシーン、高層湿原の花之江河、永田岳、などの風景写真が掲載されていた。女性登山者の帽子はつばの大きな帽子をかぶりながらの比較的軽装な登山スタイルだったが、男性登山者は、登山ヘルメットと大型の縦走用ザックを携帯していた。このほかにアルピニストや自然保護協会会長として名を馳せた武田久吉が紀行文を書いている<sup>(41)</sup>。「新しい国立公園探訪シリーズ」も生まれ、これまでの秘境性やアクセスの不便さを強調する内容とは少し異なり、「こんな島にこんな立派な飛行場<sup>(42)</sup>」に着陸したうえで、「思ったよりはずっと立派な道<sup>(43)</sup>」をタクシーで移動しながら、里の観光地(海亀の産卵風景や滝)や、屋久島国有林の森林軌道を上る機関車に載せてもらいながら山中に入りウィルソン株や小杉谷集落をめぐるなど、観光的要素を多分に含む内容となった。

しかし1970年代から1980年代になると、再び紹介される観光地は、里・海岸地域の割合が高くなる。例えば、グラビア特集「屋久島の自然の中で」では、中間集落のガジュマルで遊ぶ子供たち、ペンションでオセロを楽しむ女性客、ペンションの外観、ペンションの外観と山岳風景、安房川河



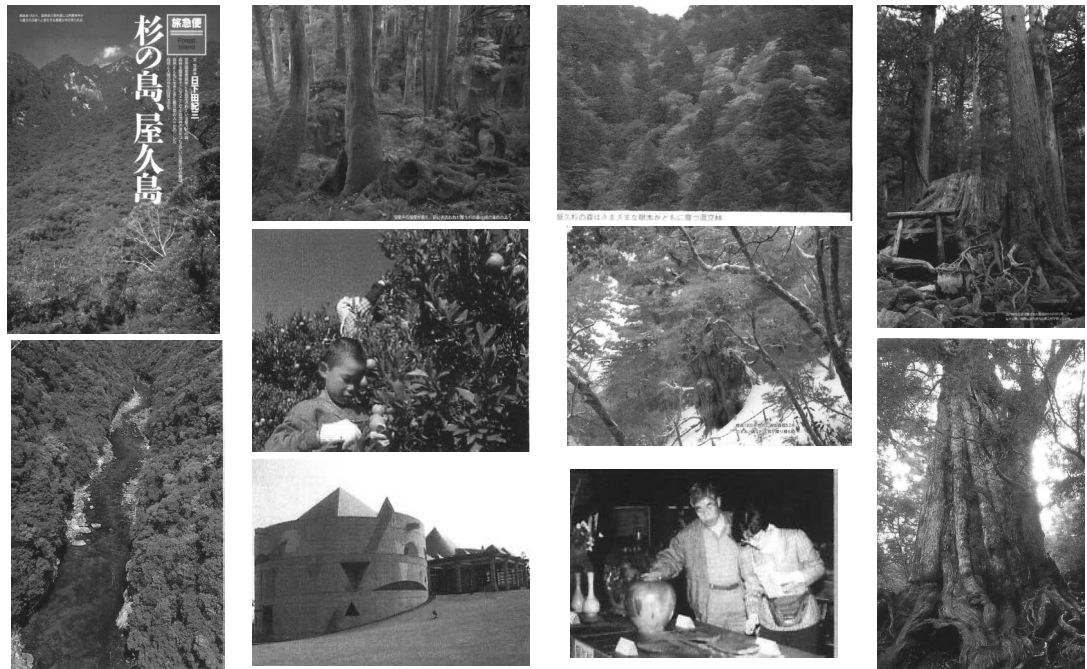


写真2 旅急便「杉の島、屋久島」

(1995年2月号 巻頭 pp.1-7。) で用いられた写真  
(10カットを集めて表示) 撮影: 日下田紀三

口、平内海中温泉、大川の滝、ヤクスギランドの屋久杉の一つである仏陀杉が写真として掲載され<sup>(44)</sup>た。1960年代のグラビアのように、登山スタイルの写真はなく、ガジュマルや滝などの身近な観光地やペンションの快適さが主張される写真構成と考察される。文章をみても、「樹齢七二〇〇年の縄文杉、五〇〇〇年の大王杉のような王者格は、けわしい山中にあって簡単に姿をみせてはくれない。しかし、その片鱗に接しようと思えば、車で訪れることのできる原生林、標高一〇〇〇mの「屋久杉ランド」を訪ねることだ<sup>(45)</sup>」とあるように、屋久杉を鑑賞する場所として車ででも訪問可能な屋久杉ランドを紹介している。屋久島への大衆観光客向けに書かれた記事と解釈できる。このほかに、1970から1980年代の記事の特徴として、平内海中温泉や尾之間温泉など、野趣あふれる温泉に関する記事が、繰り返し掲載されていた<sup>(46)(47)(48)(49)</sup>。

1990年代前半に入ると、山岳地域を主題とした特集記事が急増する。この時期から、「世界に類を見ない貴重な自然を、永久に地球の上に残して<sup>(50)</sup>」というグローバルな視点からの論調が目立ち始める。グラビアの特集も組まれるようになったが、そこで用いられる写真は、山域をメインとする構成となっている(写真2)。

このほかに、屋久島国有林からの木材搬出の為に使用されていた森林鉄道を、「歴史的記念物として保存し、学習観光に活用しようという話が地元から持ち上がっている。実現までには、いろいろな問題があるのだが、<sup>(51)</sup>「夢の登山鉄道」ではある」として観光利用の可能性を模索する特集記事が組まれた。屋久町企画調整課(当時)の職員が同行する形で、ダムの維持管理のために利用されているとはいえ一般観光客の乗車は認められていない区間(安房苗畑-小杉谷)を、気動車で上り、トロッコで下った時の様子を記事にしている。「終点の小杉谷に研修所をつくって、自然愛護の道

場にしようとする案もあります」<sup>(52)</sup>といった役場職員の夢や、仮の駅名なども紹介されていた。なお森林鉄道を紹介する記事は1990年代にもいくつか掲載された。<sup>(53)</sup>  
<sup>(54)(55)</sup>

さらに1990年代には、同行するガイドから自然解説をうけながら自然地域を散策するエコツーリズムが屋久島で少しずつ盛んになっていった。<sup>(56)</sup>雑誌「旅」でも3泊4日の「海・山・川を体験するごく初心者向けのメニュー」という特集が組まれ、エコツーリズム体験記が掲載された。<sup>(57)</sup>シャクナゲの森公園（栗生）、大川の滝、千尋滝、屋久杉自然館、一湊浜、志戸子ガジュマル園、白谷雲水峡などでの散策を体験した。ボートもこいだ記憶がないという初心者の著者が、カヌー漕ぎができるか不安を抱いていたが、意を決して挑戦したところ、「静かな川の上にカヌーをこいで川と一体になったような、うれしい気分である。こんな人生もあったのかと、めったに味わえない体験に思いついてチャレンジして良かったと思った」<sup>(58)</sup>という前向きな気持ちに変わっていた。そして、「私のような初心者でも、あるいはたった一人でこの島を訪れたとしても、あらゆる自然の魅力をわずかな日々でも教えて下さるだろう」とエコツーリズムを評価していた。<sup>(59)</sup>

2000年から2004年の時期は、屋久島についてページ数の多い特集記事が組まれている。特に2003年3月号では、総ページ数が75ページの特集「屋久島 自然に還る旅」<sup>じねん</sup>が組まれた。この特集号の冒頭には、「世界遺産に登録されてから10年目を迎えた屋久島。しかし“樹齢7200年”の謳い文句で神話化された縄文杉を、早足で見て回るだけではもったいない。額縁に入れられ祀り上げられた「大自然」<sup>だいしぜん</sup>ではなく、島と島人の「ありのまま」を見つめる旅へ。そして、自分自身の「あるがまま」に還る旅へ。そんな「じねん」の旅こそ、屋久島には相応しい」<sup>(60)</sup>という狙いが表明されていた。2003年当時、世界遺産登録後から急増する縄文杉ルートへの利用集中がすでに発生していて、特集号を通じて、縄文杉に利用が集中する大衆観光に対するオルターナティブを提案する流れになっている。例えば、文化人類学者がエコツアーに参加しながら、ヤクザルやヤクシカとの遭遇や、かつての開拓集落跡を散策する特集が組まれた。<sup>(61)</sup>この他に、小説家の島田雅彦がエコツーリズムガイドと一緒に島を回りながら、屋久島の天然ものの食材に舌鼓を打つという特集もあった。<sup>(62)</sup>さらに、エコツーリズムガイドと一緒に白谷雲水峡を散策するツアーに関する記事では、もののけの森を求めて多くの観光客がやってくる一方で、コケが踏圧によって失われたり、弥生杉の木皮がはがされている現状も紹介していた。<sup>(63)</sup>

そして特集号の最後には、1970～80年代に屋久杉原生林伐採禁止運動にもかかわったメンバーも参加して、島民が世界遺産登録後10年を振り返った。<sup>(64)</sup>そこでは、当時の観光のあり方を辛辣に捉える意見が多く表明された。まず、「縄文杉に行っていない島の人には、意外に多いよ。特に70歳以上の女性は、ほとんど訪れていないはず。女人禁制の山だったし」<sup>(65)</sup>「兵頭」に象徴されるように、かつて縄文杉を含む山岳地域は、島民にとっては安易に立ち入る場所ではなかったという島民の価値観が紹介された。しかし木道整備などが進められる中で、多くの人々が山岳地域を訪問するようになり、「8年前に登った時、縄文杉の後ろの空洞に大便があって、ここまで俗化されたか」<sup>(66)</sup>「長井」といった山岳地域の利用集中問題を批判的に捉える意見も出された。縄文杉以外の山岳地域の環境変化についても、例えば高層湿原の花之江河<sup>はなのえこう</sup>については、「面影がないね。昔は緑の苔でふかふかしていたのに」<sup>(67)</sup>「中島」という環境悪化を憂慮する意見が出され、さらに「そもそも遠くから眺める場所で、人が入れる場所ではなかった。花之江河のような小規模で繊細な土地に木道を通してし

まった（昭和 56 年）こと自体、間違いだったんだ」<sup>(68)</sup>「兵頭」という行政に批判の目が向けられた。

このほかに「昔は、辻峠から 20 分ほどの太鼓岩にしても迷いながら道を捜して行く楽しみがありました。それが、道しるべの赤いテープが巻かれ、道がはっきりとわかるようになり、両側の木が伐採され、人がたくさん通るようになった」<sup>(69)</sup>「山下」といった施設整備によって立ち入りを容易にする観光開発のあり方に疑問が呈された。さらに、当時急成長を遂げるエコツーリズム産業に対して、「エコツアーは自然だけを対象に語られているが、その土地に根づいた人の暮らしも含めて考えるべきだよ。それがないと成り立たないはずだ。とくに屋久島の場合、それがスポッと抜け落ちている」<sup>(70)</sup>「兵頭」という問題提起もあった。

## ④……………雑誌「るるぶ」における観光地「屋久島」の扱い

### 4-1 雑誌「るるぶ」の特徴

本章では、JTB パブリッシングが発行する雑誌「るるぶ」をとりあげる。「るるぶ」シリーズは、1984 年にはじめて出版された『るるぶ京都』を皮切りに、国内外の特定地域の観光情報を発信し続け、2011 年に「発行点数世界最多の旅行ガイドシリーズ」としてギネスブックに記録され、2016 年には通巻が 5,000 巻、総発行部数が 4 億 5,000 万部を超えるなど、現在の日本国内における主要な観光ガイドブックとして位置づけられる<sup>(71)(72)</sup>。また同シリーズでは、数年おきには情報が更新されるため、同一地域における観光トレンドを細かく追うことができる。

### 4-2 雑誌「るるぶ」についての定量的な分析

屋久島が掲載された最初の「るるぶ」シリーズは、1991 年から出版が始まった「るるぶ鹿児島」である。「るるぶ鹿児島」シリーズは、鹿児島市内を中心に、霧島、薩摩半島、大隅半島の観光地を中心に紹介するものだが、離島についても、「鹿児島の島々」などといった章を設けて簡単に解説している。冊子全体の分量は、いずれの時代（1991 年から 2013 年）も概ね 120～130 ページ程度で、特に大きな変動はない。

図 4 は、「るるぶ鹿児島」における屋久島の取り扱いページ数の推移を示している。これを見ると、1990 年代は屋久島記事の総ページ数は 4 ページ程度に過ぎなかった。1998 年版の「るるぶ鹿児島」からはヤクスギランドといった特定の場所に焦点を絞った特集号が組まれるようになる。特に 2000 年版から 2006 年版にかけては海や川を対象としたエコツアーの特集が頻繁に生まれ、2005 年版前後には総ページ数も 7 ページに達した<sup>(75)</sup>。

さらに 1999 年版から、「るるぶ屋久島種子島奄美」の出版が開始された。「るるぶ屋久島種子島奄美」では、屋久島、種子島、奄美だけでなく、与論島といった奄美群島に属する島々も紹介されている<sup>(76)</sup>。

図 5 は、るるぶ「屋久島種子島奄美」で掲載された特集記事を地域ごとにまとめたものである。これを見ると、2003 年版ごろまでは、屋久島や奄美群島の特集といっても、屋久島の記事は 30 ページにも満たず、むしろ奄美群島が中心的に紹介されていた。ところが 2004 年版以降になると、屋久

島の取り扱い記事が40ページに達し、奄美群島に関する記事よりも多くの紙面が割かれた。その後屋久島に関する記事は毎年30ページ以上、掲載されるようになる。

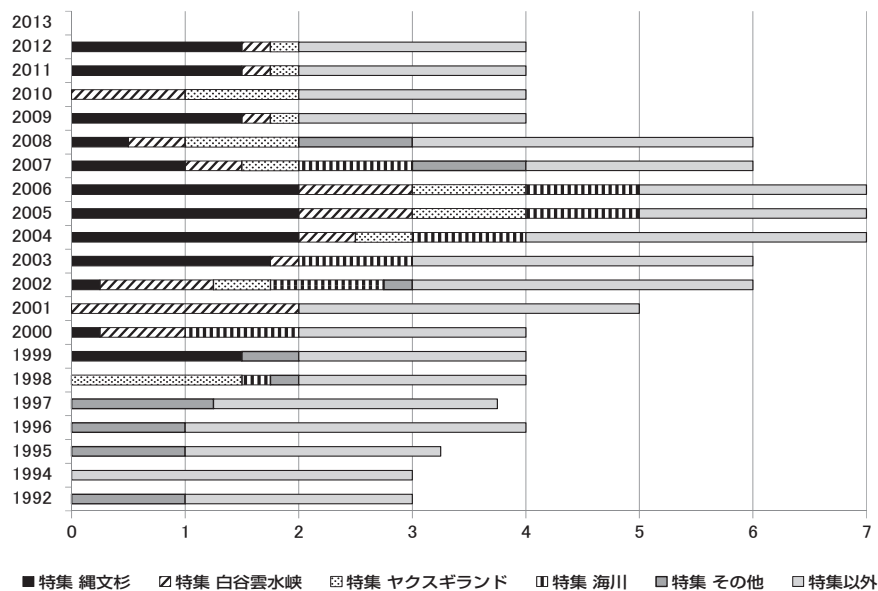


図4 るるぶ「鹿児島」における屋久島記事のページ数と記事の内容<sup>(73)</sup>

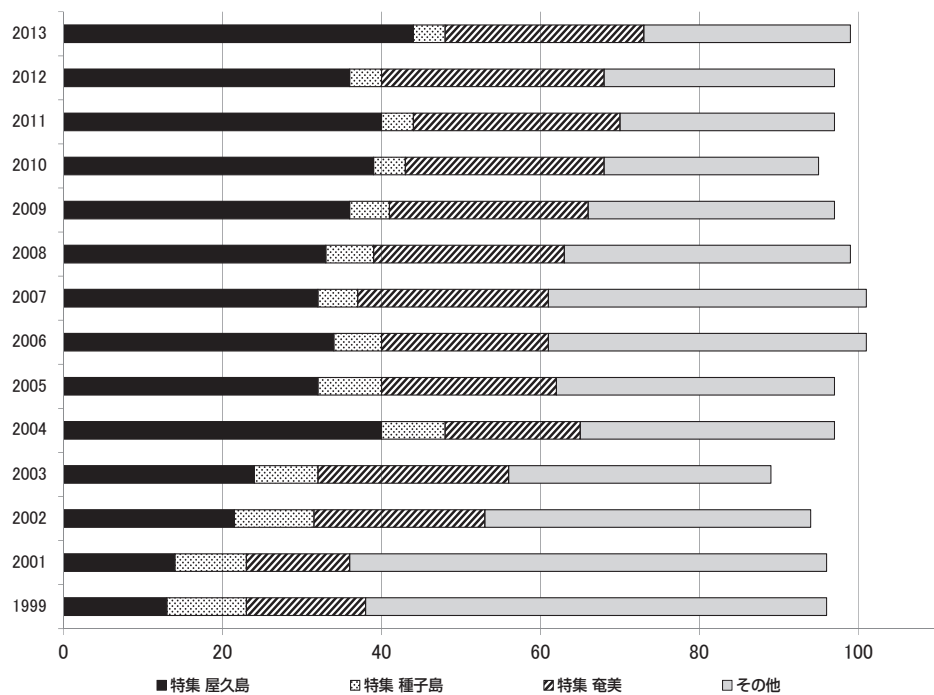


図5 るるぶ「屋久島種子島奄美」における各地域の特集記事取り扱いページ数<sup>(77)</sup>



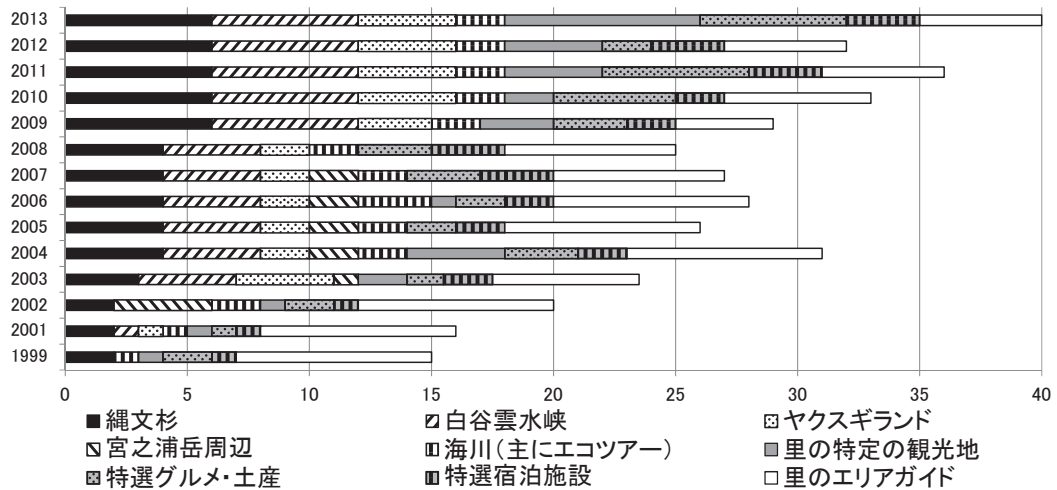


図6 るるぶ「屋久島種子島奄美」における屋久島記事の構成<sup>(78)</sup>

図6は、屋久島記事の紹介している内容をページ数で表現したものである。2001年版あたりまでは、里に関する記事の方が山岳地域に関する記事の方が多くの紙面が割かれていた。2002年版以降になると、山岳地域に咲かれるページ数は増えていく。とりわけ縄文杉と白谷雲水峡の特集が多く組まれていたことが読み取れる。なお2011年版や2013年版には、里の特定の観光地や里のグルメ・土産物を紹介するページも多く掲載されていた。

#### 4-3 雑誌「るるぶ屋久島奄美種子島」についての定性的な分析

雑誌「旅」と同様に、雑誌「るるぶ屋久島奄美種子島」の詳細を、文章だけでなく写真からも明らかにしていく。雑誌「るるぶ屋久島奄美種子島」では、縄文杉、白谷雲水峡、宮之浦岳、ダイビング、リバーカヤックなどの主流なアクティビティが特集記事として扱われていた。

表2は、「るるぶ屋久島・種子島・奄美」に掲載された特集記事の中で用いられた写真の被写体構成を、「有人・無人」、「性別」、「ガイドの有無」に焦点をあてて分析を行ったところ、以下の点が明らかになった。第1に、山岳地域に関する特集では、2001年版までは、観光客の写らない無人の写真が多く用いられていたが、次第に来訪者が写った写真が多用されるようになった。その一方で、海や川に関する特集では、1990年代後半からガイド同伴で来訪者がアクティビティを楽しむ写真が多く使われていた。第2に、観光客の性別に特徴がみられた。具体的には、写真に掲載される観光客が、次第に女性観光客が掲載される頻度が年々高まってきていた。第3に、縄文杉については、女性観光客がエコツーリズムガイドと同伴で目指す観光形態が2009年版以降、継続的に紹介されるようになっていった。さらに細かいイメージの変化を追うために、主要登山ルートである縄文杉日帰りコースと白谷雲水峡に関する特集記事をみていくことにしたい。



#### 4-3-1 縄文杉日帰り登山ルートに関連した記事の変遷

まず、山岳地域の主要な観光資源である縄文杉ルート（荒川口～縄文杉往復ルート）に関する特集記事を取りあげる。1999年版では、特集記事の冒頭部に、登山道や道標は整備されているものの、「トロッコ道から木の根這う段差のある道が続く本格的な登山道なので、足や体力に自信のない人は避けた方がいいだろう<sup>(80)</sup>」とあり、登山リスクに関する言及が記事の冒頭にあった。また2002年版までは、縄文杉ルートを撮影した写真に、グループで歩く登山者の姿はない。例えば2002年版では、欄干がなく落下する危険性のある橋を登山者が一人で渡るなど、孤高感が強調される構図が採用されていた<sup>(82)</sup>。

こうした傾向に変化がみえ始めたのは2003年版からで、女性客・男性客の混じったグループが、縄文杉登山を目指す写真が使われるようになる<sup>(83)</sup>。さらに2005年版では、特集記事の最後の見出し(コラム)に、「私がガイドしました!」という表示があり縄文杉ルートに関するエコツーリズムガイドによる解説が行われていた。2006年版から2008年版には、エコツーリズムガイドが同行するスタイルで記事は書かれなかったが、2009年版では、写真付きでエコツーリズムガイドが案内する形で、普段山登りをしたことがない女性が、「運動習慣ゼロ。体力ナシ。気合と根性だけでがんばります!」と意気込んで縄文杉にチャレンジする企画が組まれるようになる。2011年版以降になると、縄文杉主要コースのポイントとして、「比較的わかりやすいルートではあるが、往復約10時間もかかるため、登山初心者はガイド付きツアーがおすす<sup>(86)</sup>め」などと書かれるようになり、一般的な縄文杉日帰り登山にエコツーリズムガイドを利用することを勧める形になっていく。そして2014年版では、縄文杉主要コースが恋愛成就などのパワースポットとして紹介されるようになっていく。こうしたパワースポットとして紹介されるようになったのは、ウィルソン株と呼ばれる切り株の影響が大きい。ウィルソン株については、豊臣秀吉が方広寺建立の際に、伐採された屋久杉の伐根という言い伝えがあることや、米国の植物会社であるウィルソン博士が大正期に世界に証明したこと<sup>(87)</sup>にちなんでウィルソン株の名称がつけられたといった紹介が多かった。しかし、空洞がハート形にみえる場所が発見されると、2009年版以降はハート形を強調してウィルソン株が紹介されだす<sup>(88)</sup>。さらに2014年版になると、「自然の造形、ハート株パワーで恋愛成就<sup>(89)</sup>」と表現され、いわゆる恋愛運を引き寄せるパワースポットとして紹介されるようになる。

このほかにも、縄文杉登山ルート上に生育する形の変った杉の巨木について、2005年版では小さい文字で「通称・メデューサ<sup>(90)</sup>」と紹介されていたが、2006年版以降では「メデューサと呼ばれる杉<sup>(91)</sup>」や「メデューサの木<sup>(92)</sup>」として紹介されるようになった。このほかにも、巨大な口を開けたような形から「マグロの頭」(2010年版以降)と呼ばれる杉の巨樹や、「へそや女性器を想起させることから、撫でると子宝に恵まれると口コミで人気<sup>(93)</sup>」の名もない杉の木や、映画「いま、会いにゆきます」のDVDジャケットとして撮影された名もなき杉なども撮影ポイントとして紹介されるようになる。

#### 4-3-2 白谷雲水峡に関連した記事の変遷

1999年版では白谷雲水峡に関する特集記事はなく、宮之浦周辺の観光地の一つとして紹介されるにすぎなかったが、<sup>(95)</sup>「映画もののけ姫のモデルになったという美しい森<sup>(96)</sup>」ということは既に紹介されていた。

表2 るるぶ「屋久島種子島奄美」の特集記事で用いられる写真構成<sup>(79)</sup>

	登 山				海 川			
	縄文杉	白谷雲水峡	ヤクスギランド	宮之浦岳 黒味岳 花之江河	ダイビング	リバーカヤック	沢登り	シーカヤック シュノーケリング
1999	8	N.A.	N.A.	N.A.	N.A.	3	5	3
2001	8	8	8	N.A.	N.A.	N.A.	1	N.A.
2002	8	100	100	6	N.A.	1	N.A.	N.A.
2003	6	6	100	100	N.A.	N.A.	N.A.	N.A.
2004	6	6	100	6	N.A.	N.A.	N.A.	N.A.
2005	5	5	7	5	N.A.	N.A.	N.A.	5
2006	6	6	8	8	7	9	1	7
2007	6	6	8	100	1	3	1	1
2008	8	4	8	N.A.	1	1	1	1
2009	1	1	8	N.A.	1	1	1	N.A.
2010	1	8	8	N.A.	1	N.A.	1	1
2011	1	2	2	N.A.	1	7	1	N.A.
2012	1	2	2	N.A.	1	7	1	N.A.
2013	1	2	2	N.A.	1	7	1	N.A.
2014	1	1	2	1	5	5	5	5

記号：女性観光客+ガイド=1，女性観光客+ガイドなし=2，男性観光客+ガイド=3，男性観光客+ガイドなし=4，  
観光客男女+ガイド=5，男女観光客+ガイドなし=6，性別不明観光客+ガイド=7，性別不明観光客+ガイドなし=8，  
子ども=9，風景のみ=100，N.A.=特集記事なし・判定困難

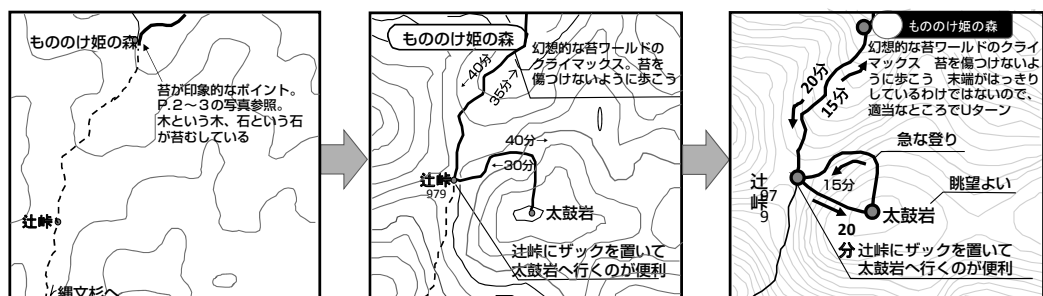


図7 ものけ姫の森—辻峠—太鼓岩ルートの表記の変化（イメージ図）

左：るるぶ屋久島奄美種子島 2003:p.7 を参考に筆者が加工  
中央：るるぶ屋久島奄美種子島 2004:p.13 を参考に筆者が加工  
右：るるぶ屋久島奄美種子島 2009～2010:p.23 を参考に筆者が加工

白谷雲水峡に関する特集記事が組まれたのは 2001 年版からで、屋久島に存在するもう一つの自然休養林であるヤクスギランドや縄文杉とともに紹介された<sup>(97)</sup>。2003 年版以降は、白谷雲水峡単独で特集記事として取りあげられる。そして、白谷雲水峡から「もののけ姫の森」を往路の最終目的地とする周回ルートの等高線のついた地図が 2003 年版に初めて掲載された<sup>(98)</sup>。

2004 年版からは、白谷雲水峡の特集記事のタイトルが、「森に漂う神聖な空気を感じながらもののけ姫の森を目指す」<sup>(99)</sup>となるなど、映画のモデルとなったとされる点がより強調された。また同年版から、「もののけ姫の森」からさらに登ったところにある「太鼓岩」と呼ばれる場所が、穴場の訪問先として詳解されるなど、「もののけ姫のモデルになった美しい森」周辺の観光地の紹介も強化された<sup>(100)</sup>。

2005 年版では、エコツーリズムガイドが白谷雲水峡を案内する形態での記事で初めて掲載された<sup>(101)</sup>。2006 年版以降になると、「もののけ姫の森」の先にある太鼓岩頂上が来訪者付きの写真で掲載され、秘密の場所から、「ひと足のばして」<sup>(102)</sup>訪問できる場所として紹介されるようになる。2008 年版には「もの

のけ姫の森」の看板の写真が掲載され、<sup>(103)</sup>2009年版からは辻峠から太鼓岩に向かうルートについて往路と復路の周回路が明記されるなど、「もののけ姫の森」およびその周辺地域の観光地としてのフォーマル化が進んだ(図7)。

しかし2011年版から「もののけ姫の森」という表現が、「苔むす森」と変更され、『もののけ姫』のモチーフになったとされる森<sup>(104)</sup>となり、断定的な表現が弱められた。さらに、2011年版以降、白谷雲水峡の特集記事の冒頭のタイトルから「もののけ姫」という用語が用いられなくなった。これは、2008年に屋久島森林環境保全センター(当時)の担当職員が、映画「もののけ姫」(1997年)の制作会社に、「もののけ姫の森」の看板を設置している旨を念のため伝えたところ、同社から、映画名称の入った看板の設置はできればご遠慮いただきたいという主旨の回答をもらったため、同年12月に「もののけ姫の森」<sup>(105)</sup>の看板を撤去したことが影響していると考えられる。

そして2010年版までは可能であれば訪問したい場所として扱われていた太鼓岩だったが、2011年版以降になると、「もののけ姫の森」に代わる往路の最終目的地として紹介されるようになる。<sup>(106)</sup>

このように、観光地「白谷雲水峡」周辺の観光地の紹介は、年々変わってきていることが読み取れる。しかし全ての観光地で同様な変化を遂げるとは限らない。例えば白谷雲水峡と同じく自然休養林に指定されている「ヤクスギランド」については、一部の観光スポットが加えられたりしているが、訪問ルートが大幅に変更するような変化は起きていない。<sup>(107)</sup>

#### 4-4 雑誌「るるぶ」を用いた分析の総括

屋久島に関連する雑誌「るるぶ」シリーズを分析した結果、以下の結果が判明した。第1に、1990年代初めごろには、離島の一つとして「るるぶ鹿児島」に紹介されていた屋久島が、世界遺産登録後の1998年以降は特集記事が組まれるようになり、1990年代後半には、屋久島を主要な観光地として紹介する「るるぶ屋久島奄美種子島」シリーズの出版が開始された。この時期は、屋久島の入込客数が増加を続けた時期であり、観光地「屋久島」の大衆化が進んだ時期と重なるものといえる。

第2に、新たな観光形態としてのエコツーリズムも雑誌「るるぶ」シリーズで紹介されるようになってきた。当初は、海(ダイビング)や川などを対象に紹介する記事が多かったが、2010年代に入ると、縄文杉などの山域にもガイド利用を進める記事の頻度が高くなっていった。

第3に、観光地「屋久島」としての対象が、1990年代は必ずしも山域に特化していなかったものが、2000年代以降になると山岳地域に集中し、とりわけ縄文杉、白谷雲水峡、ヤクスギランドについて特集記事が組まれるようになった。さらに興味深い変化として、縄文杉ルートでは、当初は孤高さを強調する写真が多く使われていたが、次第に女性客を中心とした登山初心者もアクセスできる場所として紹介されるようになっていく。

第4に、縄文杉ではメデューサの杉や、白谷雲水峡での太鼓岩に代表されるように、縄文杉や白谷雲水峡を訪問するルートでは、ルート上に新たな観光資源が紹介されるようになる。また同一の資源であっても、ウィルソン株のハート形の空洞のように、新たな価値付けがなされるものもある。

## おわりに（考察と結論）

雑誌「旅」や雑誌「るるぶ」シリーズを分析した結果、観光地「屋久島」のイメージが変わり続けてきたことが明らかになった。1950年代から1960年代初めにかけては、屋久島の「秘境」性が強調され、山岳地域よりもむしろ「秘境」に暮らす島民の暮らしに興味が集まっていた。国立公園に編入された1964年頃には、屋久島の山域を紹介する記事も登場したが、1970年から1980年代に入っても、なお里地のペンションや温泉を紹介する記事や写真が多く使われた。しかし1990年代に入り、山岳地域が世界遺産に登録されるようになると、取り扱われる記事は縄文杉や白谷雲水峡などの山岳地域が中心となっていく。こうした中で、新たな産業としてエコツーリズムガイドを利用する観光形態を紹介する特集記事も1990年代終わりごろから滝やカヤックなど川や海のアクティビティを中心に掲載され、次第に縄文杉や白谷雲水峡などの山域にも波及していった。さらに2010年前後からは、縄文杉ルートのウィルソン株のハート形の空洞や、その他の面白い形をした杉の巨樹や、白谷雲水峡周辺の太鼓岩など、新たな観光地が紹介されるようになっていった。その一方で、一時期（1990年代前半）には、雑誌「旅」などで盛んに紹介された屋久島の森林軌道だが、2009年に近代化産業遺産に認定されたにも関わらず、屋久島国有林内の森林軌道についての記事が特に増えたわけではなかった。

こうした時代ごとの価値の移ろいをもたらす要因だが、初期の段階（1950～1970年代）としては、観光地へのアクセス条件が大きく左右しているものと考えられる。「秘境」性が強調された時期には、そもそも観光客向けの交通機関（飛行機や船など）が十分整備されていなかった。屋久島に到着してからも、山岳道路は建設されておらず、容易に山域に立ち入ることができず、結果的に里地の暮らしに関心が高まったものと考えられる。国立公園指定後には、山岳道路、避難小屋やトイレなども少しずつ整備されていったが、公的機関がレクリエーション施設の整備を本格化させるのは世界遺産登録後の話であり、それゆえに1990年代以降に、屋久島の山域に関する記事が多く組まれたものと推察される。そして山岳地域への整備が容易になると、登山者だけでなく、トレッキングやハイカー、観光客も容易に立ち入ることができるようになり、さらに山域への来訪者が急増<sup>(109)</sup>し、再び観光施設を整備する必要性に迫られるというイタチゴッコの状況が発生した。

またトイレや木道といった山岳地域の観光施設がある程度整った2000年代以降になると、価値の移ろいはさらに変化のスピードを増していき、これまで観光資源ではなかったものが、次々と資源化されていく。縄文杉ルート上のウィルソン株のハート型の空洞や、白谷雲水峡周辺の「もののけ姫の森」や「太鼓岩」などが代表例として挙げられよう。

短期間のうちに観光資源が次々に誕生する要因として、屋久島の場合には、エコツーリズムガイドと観光ガイドブックの相乗効果が考えられる。前章でも説明したが、こうした新たな観光資源が発掘される現象は、エコツーリズムの主要な訪問先（縄文杉や白谷雲水峡）でより頻繁に発生していた。エコツーリズム客を案内する中で、ガイド側としては新たな観光資源を発掘し、それをエコツーリズムガイド業の価値づけに用いようとする動機が働く。ガイドブックを出版するメディア側にとっても、山岳地域に精通した人から、新しい現地の情報がもたらされればそれを掲載しようと



する動機が働く。こうした双方の意向が重なり、「るるぶ」シリーズなどの時代に敏感な観光雑誌に頻繁に、観光地イメージが更新されてきたといえよう。しかし新たに誕生した観光イメージは、地域の歴史性と無関係である場合が多く、時にコンフリクトも生み出す。白谷雲水峡の場合には、映画制作会社からのクレームであり、太鼓岩の場合には、島民らの秘密の場所が開発されたことや、原生度が失われたことに対する島民の不満<sup>(110)</sup>として表出した。むろん屋久島の歴史性と無関係だという理由から、新たに観光資源は真正でない<sup>(111)</sup>と安易に批判することはできない。例えば、縄文杉も発見されて50年程しかたっておらず、当初は、発見者の岩川貞治氏は大岩杉と命名していた。その後、発見者の意向とは異なり、縄文杉という呼称が一般に定着していった。いわゆる構築的真正性<sup>(112)</sup>（Constructive Authenticity）や創発的真正性<sup>(113)</sup>（Emergent Authenticity）のように、当初は偽物のように認識されても、時間の経過を経て真なるものとして評価される可能性はある。

ただし自然資源を対象とした保護地域の場合、開発による不可逆性の問題と、リスクマネジメント上の問題を指摘しなければならない。すなわち、ディズニーランドや日光江戸村のようなアミューズメント施設と異なり、保護地域は稀有な自然景観や生態系を有する地域に設定される場合が多いため、いったん観光開発を行うとそれを元に戻すことは困難を極めることになる。また観光開発が進むと、登山客以外の物見遊山型の観光客も押し寄せることになり、奥入瀬溪流の落枝事故のように訴訟問題に発展するリスクを行政側が潜在的に抱えることになる<sup>(114)</sup>。屋久島の場合には、縄文杉や白谷雲水峡より標高の高い山域においても、公園計画上には園地や登山道と設定されていない石塚山や高盤岳にも歩道が事実上「整備」され、ガイド事業も行われている。

こうした状況を鑑みると、観光地「屋久島」全体に対する情報発信のあり方の指針を作り、管理体制が十分整っていない段階から観光地として紹介され始めたケースには、そうした場所の情報発信の自粛をお願いするなどの対応が、持続的な観光地として成り立つために必要と考えられる。もちろんその場合には、情報発信のあり方の指針を作るための前段階として、ROSやLAC、VERPと呼ばれるような保護地域管理の枠組みに基づいて、どのような場所でどのような観光レクリエーション体験を提供し、リスクマネジメントやエコシステムマネジメントの体制を構築しておく必要があることは言うまでもない。

そして、原始的な空間として分類される場所については、整備水準を出来る限り控えるだけでなく、情報提供に関しても控えめにするような仕掛けづくりを行政機関が設け、過剰利用や山岳事故<sup>(115)</sup>を未然に防ぐことが望ましい。

#### 註及び参考文献

(1)——西田正憲. 2009. 表象空間としての国立公園にみる風景の政治学. 地域創造学研究, 20(2): pp. 15-45. 引用は p.16.

(2)——丸山 宏. 1983. 国立公園設置運動に於ける社会・経済史的背景. 京都大学農学部演習林報告, 55: pp. 271-290.

(3)——村串仁三郎. 2005. 国立公園成立史の研究. 417pp, 法政大学出版局.

(4)——曾山 毅. 2003. 台湾八景と植民地台湾の観光.

立教大学観光学部紀要, 5: pp.65-74. 引用は pp. 66-68.

(5)——村串仁三郎. 2008. 戦後後期の国立公園制度の整備・拡充(1) 1951年-1957年. 経済志林, 76(2): pp. 265-309. 引用は pp. 307-308.

(6)——森津千尋. 2012. メディアに描かれる「南国宮崎」—宮崎新婚旅行ブームを中心に—(日本の地域社会とメディア, 地域社会と情報環境研究班編), pp. 29-46.

(7)——神田孝治. 2012. 与論島観光におけるイメージの変容と現地の反応. 観光学, 6: pp. 21-31.



(8)——佐滝剛弘. 2009. 「世界遺産」の真実—過剰な期待, 大いなる誤解—. 292pp. 祥伝社. 引用は p.20.

(9)——近年「ユネスコ・エコパーク」という用語が頻繁に用いられるが, 日本国内でのみ通じる通称である。海外でも通じる略語は, BRs (Biosphere Reserves) である。本稿では正式名称である生物圏保存地域を用いる。

(10)——柴崎茂光・枚田邦宏・横田康裕・永田 信. 2006. 世界自然遺産登録が地域資源管理体系に及ぼす影響—屋久島の山岳地域を事例として—. 林業経済, 59(8):pp. 1-16. 引用は p.13.

(11)——皮肉にも, 一部のマニアによって, 廃墟ツーリズムとして再資源化されているという現状もある。

(12)——Dudley, N. (ed.). 2008. Guidelines for applying protected areas management categories. 106pp. IUCN, Gland, Switzerland. 引用は p. 8.

(13)——柴崎ら. 2006. 前掲書. p. 3 を加筆修正して作成。山中の細い線は主たる登山道である。

(14)——柴崎茂光. 2015. 屋久島におけるエコツーリズム業の経済分析. 国立歴史民俗博物館研究報告, 193: pp. 49-74. 引用は p. 69.

(15)——柴崎茂光. 2015. 前掲書. p. 59.

(16)——馬場 健・森本幸裕. 2006. エコツーリズム推進地域屋久島における来訪者の資質と課題. 環境情報科学論文集, 20: pp. 159-164.

(17)——柴崎茂光. 2015. 屋久島に眠る人々の記憶. 国立歴史民俗博物館民俗研究映像 (80 分).

(18)——Hillman, W. 2007. Travel authenticated? —Postcards, tourist brochures, and travel photography. *Tourism Analysis*, 12: pp. 135-148.

(19)——Youngs, Y. 2012. Editing nature in Grand Canyon National Park postcards. *Geographical Review*, 102 (4): pp. 486-509. 引用は pp. 492-509.

(20)——Debussche, M., Lepart, J., and Dervieux, A.. 1999. Mediterranean landscape changes—Evidence from old postcards. *Global Ecology and Biogeography*, 8(1): pp. 3-15.

(21)——関戸明子. 2007. 近代ツーリズムと温泉, 206pp. ナカニシヤ出版.

(22)——神田孝治. 2010. 熊野の観光地化の過程とその表象. 国立歴史民俗博物館研究報告, 156: pp. 137-161.

(23)——倉澤知久・十代田 朗・津々見 崇. 2013. 観光雑誌にみる町並み観光地のイメージの変遷と地域特性との関連に関する研究. 日本都市計画学会都市計画論文集, 48(3): pp. 1095-1100.

(24)——津田夕梨子・十代田朗・津々見 崇. 2011. 雑誌『旅』にみる温泉地に対するイメージの変遷に関する研究. 日本都市計画学会都市計画論文集, 46(3): pp. 607-612.

(25)——神田. 2012. 前掲書. pp. 25-27.

(26)——有馬貴之. 2015. 旅行ガイドブックにみる富士山観光のイメージ変化—『るるぶ富士山』の目次を対象としたテキスト分析—. 地学雑誌, 124(6): pp. 1033-1045.

引用は p.1044.

(27)——2004 年, JTB パブリッシングからの出版は休刊となった。同年新潮社がコンセプトを変える形で「旅」を再出版したものの, 2012 年で再び休刊となった。出版社ごとにコンセプトが異なることから, 本稿では新潮社から出版された冊子は分析の対象外とした。

(28)——高橋 洋. 2000. 旅行雑誌の特集テーマに見る観光動向. 立教大学観光学部紀要, 2: pp. 61-72. 引用は p. 65.

(29)——高橋. 2000. 前掲書. p. 65.

(30)——森 正人. 2010. 昭和旅行誌—雑誌『旅』を読む—. 269pp. 中央公論新社.

(31)——累計ページ数は, 1 ページを基本単位とした。ページの途中で終了している記事や, 1 ページに満たない記事については, 小数点第一位を四捨五入した。

(32)——屋久島に関する写真だけでなくイラストも写真点数に加えたが, 地図や映画カットは対象から除いた。また撮影場所の判断が困難な資料はその他に分類した。

(33)——人間の全体写真 (少なくとも上半身もしくは下半身) であると判明できるものを有人とカウントした。人工物があっても, 人間が確認できなければ無人とカウントした。

(34)——下村海南. 1952. 五島と屋久. 旅, 1952 年 9 月号: pp. 88-91. 引用は p. 91.

(35)——別所重次郎. 1953. グラビア—孤島をさぐる屋久島—. 旅, 1953 年 10 月号, pp. 5-7. 引用は p. 6.

(36)——別所. 1953. 前掲書. p. 6.

(37)——加藤数功. 1956. 特集厳冬に春を求めて 山頂と麓が別世界の島屋久. 旅, 1956 年 2 月号: pp. 26-29. 加藤数功 (1902-1969) は, 九州の著名な登山家で, 大分県県文化財専門員も務めた。

(38)——佐山 浩. 2002. 屋久島の国立公園指定に係る経緯と社会的背景. ランドスケープ研究, 65 (5): pp. 417-402. 引用は p. 417.

(39)——南日本新社. 1967. 生き続ける“縄文の春”—推定樹齢四千年 発見された大屋久杉—. 南日本新聞, 1967 年 1 月 1 日 1 面.

(40)——著者不明. 1963. 二人だけの屋久島. 旅, 1963 年 7 月号: pp. 103-106.

(41)——武田久吉. 1963. 南海に浮かぶ巨木の群像・屋久島. 旅, 1963 年 2 月号: pp. 158-161. 武田久吉 (1883-1972) は, 幕末期に外交官として来日した英国人アーネスト・サトウの実子で, 植物学者として活躍したことに加えて, 日本山岳会, 日本山岳協会, 日本自然保護協会などでいずれも会長を務めるなど日本のアルピニズムや自然保護活動の発展にも尽力した。

(42)——檀 一雄. 1964. 屋久島・その南国的野性<新しい国立公園探訪シリーズ 2> 旅, 1964 年 8 月号: pp. 150-157. 引用は p. 151.

(43)——檀. 1964. 前掲書. p. 151.

(44)——筆者不詳. 1977. グラビア「屋久島の自然の中

で」。旅, 1977年6月号: (巻頭グラビア)7pp. なお, 冊子全体でページ番号が有るものと無いものが混在し, ページ番号を特定することが困難だったことから, グラビアの全ページ数を記載した。

(45)——著者不詳. 1977. 前掲書. (巻頭グラビア)7pp. 引用はグラビア4ページ目。

(46)——山本鉦太郎. 1971. 平内<屋久島>—私の秘湯探し2—。旅, 1971年2月号: p. 114.

(47)——萩 昌弘. 1972. ハイビスカス咲く屋久・種子島。旅, 1972年6月号: pp. 147-152.

(48)——著者不詳. 1972. 南の島・屋久に湧く湯—干潮時に入る荒海の平内温泉。旅, 1972年12月号(巻頭グラビア): 6pp. なお, 冊子全体でページ番号が有るものと無いものが混在し, ページ番号を特定することが困難だったことから, グラビアの全ページ数を記載した。

(49)——著者不詳. 1983. 薩南の島いで湯めぐり 屋久島・口永良部島。旅, 1983年10月号: pp. 25-31.

(50)——姉崎一馬. 1990. 国立公園再発見—⑩霧島屋久国立公園—。旅, 1990年10月号: pp. 202-204. 引用は p. 204.

(51)——宮脇俊三. 1992. 屋久島自然林保存鉄道 (前篇)—連載 夢の登山鉄道 特別篇—。旅, 1992年3月号: pp. 60-66. 引用は p. 62.

(52)——宮脇俊三. 1992. 前掲書. p. 64.

(53)——宮脇俊三. 1992. 前掲書. p. 65.

(54)——著者不詳. 1992. 太古の森へ 屋久島自然林保存鉄道。旅, 1992年3月号: pp. 68-75.

(55)——米谷浩二. 1999. 未来へ走れ, 屋久島の森林鉄道。旅, 1999年11月号: pp. 61-66.

(56)——柴崎茂光・永田信. 2005. エコツーリズムの定義に関する再検討—エコツーリズムは地域にとって持続可能な観光か—。林業経済, 675: pp. 1-21.

(57)——本 く仁子. 1995. 屋久島エコツアー, ワクワク体験記。旅, 1995年7月号: pp. 45-51. 引用は p. 46.

(58)——本. 1995. 前掲書. p. 51.

(59)——本. 1995. 前掲書. p. 51.

(60)——著者不詳. 2003. 自然に還る旅。旅, 2003年3月号: pp. 6-7. 引用は p. 6.

(61)——西江雅之(文)・山下大明(写真). 2003. 遺された森へ—屋久島・西部林道を歩く—。旅, 2003年3月号: pp. 8-21.

(62)——島田雅彦. 2003. 屋久を食らう—島田雅彦の採れたて賄い旅—。旅, 2003年3月号: pp. 39-46.

(63)——春日和夫. 2003. 白谷雲水峽 さまざまな緑のすがたを見る。旅, 2003年3月号: pp. 56-60.

(64)——長井三郎・中島セツ子・兵頭昌明・山下大明. 2003. 屋久島, この10年—素泊まり宿「晴耕雨読」から見えるもの, 感じること—。旅, 2003年3月号: pp. 74-79.

(65)——長井ら. 2003. 前掲書. p. 76.

(66)——長井ら. 2003. 前掲書. p. 76.

(67)——長井ら. 2003. 前掲書. p. 77.

(68)——長井ら. 2003. 前掲書. p. 77.

(69)——長井ら. 2003. 前掲書. p. 78.

(70)——長井ら. 2003. 前掲書. p. 77.

(71)——JTB 広報室. 2011. JTB パブリッシング発行の「るるぶ」が世界一のガイドに認定されました! (2011年1月18日). <http://www.jtbpublishing.com/newsrelease/2011011871.pdf> (2016年8月31日取得)

(72)——JTB 広報室. 2016. 1984年発刊から32年, 総発行部数4億5,000万部 国内外シリーズラインナップ200点以上 旅情報誌『るるぶ』通巻5000号達成! (2016年7月14日). <http://www.jtbpublishing.com/newsrelease/20160714294.pdf> (2016年8月31日取得)

(73)——るるぶ. 「鹿児島」は, ページに複数の内容が掲載されているため, ページ数は, 四分の一ページを基本単位としてカウントした。

(74)——JTB. 1998. 元気と感動がいっぱい 南の島へ飛び出そう! るるぶ鹿児島: p. 116.

(75)——2006年版以降, 屋久島関連の記事は漸減し, 2013年版は屋久島の掲載ページが無くなった。これは屋久島を主として取り扱う観光雑誌が, 後述する「るるぶ屋久島種子島奄美」に移ったことを間接的に示している。

(76)——1999年版は, るるぶ「屋久島奄美」というタイトルだったが, 2001年版から「屋久島種子島奄美」と改称された。なお, るるぶ「屋久島奄美」の中でも, 種子島の観光地が紹介されていたことから, るるぶ「屋久島奄美」とるるぶ「屋久島種子島奄美」を一連のシリーズとして分析した。

(77)——ページ数は, 1ページを基本単位とした。ページの途中で終了している記事や, 1ページに満たない記事については, 小数点第一位を四捨五入した。屋久島・種子島・奄美大島以外の離島については, その他に分類した。

(78)——ページ数は, 内訳ごとに集計した。1ページに満たない記事については, 小数点第一位を四捨五入した。掲載された内容の長期的な変化を把握するために, 目次, 屋久島の概況 (早わかりを含む), 地図, アクセス方法, 広告企画 (PR) のページは分析から除外した。

(79)——特集記事の中で, 写真が2シーン以上扱われているものをカウントした。ガイド利用を前提とした特集記事の場合, 写真にガイドが掲載されていなくともガイドつきでカウントした。ガイド付きの情報とガイドなしの情報が混在する場合には, ガイド付きの情報を優先した。性別が判明している写真と判明しない写真が混在する場合には, 前者の情報を優先した。1999年版では, リバーカヤックとシーカヤックを一緒にカヤックとして掲載していたが, 表では双方の欄に同じ記号を計上した。

(80)——JTB. 1999a. 屋久杉に会いに太古の森へ 縄文杉へ歩いて往復8時間。るるぶ屋久島奄美 1999-2000: pp. 6-7. 引用は p. 6.

(81)——JTB. 2001. 屋久杉に会いに原生林の森へ 縄文杉登山ルート。るるぶ屋久島種子島奄美. pp. 10-13.

2001年版は、ヤクスギランド、白谷雲水峡、縄文杉の3つを合わせて特集記事が組まれていた。

- (82)——JTB. 2002. 縄文杉登山 太古の息吹を感じる8時間. るるぶ屋久島奄美種子島 2002-2003: pp. 6-7.
- (83)——JTB. 2003a. 歴史 縄文杉 木々と人とのものがたり. るるぶ屋久島奄美種子島 2003: pp. 12-14.
- (84)——JTB パブリッシング. 2005a. 縄文杉登山屋久島の主を訪ねて…太古の森へ. るるぶ屋久島奄美種子島 2005: pp. 14-17. 引用は p. 17.
- (85)——JTB パブリッシング. 2009a. 縄文杉への道ルポ 数千年の迫力! 世界遺産の実力やいかに. るるぶ屋久島奄美種子島 2009-2010: pp. 16-21. 引用は p. 17.
- (86)——JTB パブリッシング. 2011a. 森の王者 縄文杉に挑む. るるぶ屋久島奄美種子島 2011-2012: pp. 10-15. 引用は p. 10.
- (87)——例えば, JTB. 2002. 前掲書. p. 7.
- (88)——JTB パブリッシング. 2009a. 前掲書. p. 20.
- (89)——JTB パブリッシング. 2014a. 開運の秘奥, パワースポット屋久島. るるぶ屋久島奄美種子島 2014-2015: p. 13.
- (90)——JTB パブリッシング. 2005. 前掲書. p. 16.
- (91)——JTB パブリッシング. 2006a. 縄文杉登山 推定樹齢は7200年!? トロコ軌道をたどり, 縄文杉へ. るるぶ屋久島奄美種子島 2006: pp. 20-23. 引用は p. 22.
- (92)——JTB パブリッシング. 2009a. 前掲書. p. 19.
- (93)——JTB パブリッシング. 2014b. 縄文杉 屋久島のシンボルに会いに行こう. るるぶ屋久島奄美種子島 2014-2015. pp. 14-21. 引用は p. 21.
- (94)——JTB パブリッシング. 2014. 前掲書. p. 19.
- (95)——JTB. 1999b. 神秘的な原生林で心の洗濯をしよう. るるぶ屋久島奄美 1999-2000: p. 18.
- (96)——JTB. 1999c. 世界自然遺産屋久島. るるぶ屋久島奄美 1999-2000: pp. 4-5. 引用は p. 5.
- (97)——JTB. 2001. 前掲書 p. 10.
- (98)——JTB. 2003b. 白谷雲水峡 苔 生命を抱く柔らかなベッド. るるぶ屋久島奄美種子島 2003: pp. 4-7. 引用は p. 7. なお, 等高線のついていない簡単なルート図は2002年版から掲載されている.
- (99)——JTB. 2004. 森に漂う神聖な空気を感じながらもののけ姫の森を目指す. るるぶ屋久島奄美種子島 2004: pp. 10-13. 引用は p. 10.
- (100)——JTB. 2004. 前掲書. pp. 12-13.
- (101)——JTB パブリッシング. 2005b. 白谷雲水峡 映画のモデルになった深閑な森. るるぶ屋久島奄美種子島 2005: pp. 18-21.

- (102)——JTB パブリッシング. 2006b. 白谷雲水峡「もののけ姫」の舞台にもなった苔むす森と水の流れが神秘的な森. るるぶ屋久島奄美種子島 2006. pp. 24-27. 引用は p. 27. また, 白神雲水峡の入山口で協力金300円を支払うことが明記されたのも2006年版からである.
- (103)——JTB パブリッシング. 2008. 白谷雲水峡 千古の昔から育まれた濃密な森を巡る. るるぶ屋久島奄美種子島 2008-2009: pp. 16-19.
- (104)——JTB パブリッシング. 2009b. 白谷雲水峡ルポ 神秘的な森へ もののけ姫の世界へトリップ. るるぶ屋久島奄美種子島 2009-2010: pp. 22-27.
- (105)——JTB パブリッシング. 2011b. 白谷雲水峡をゆく 青々しい苔が密生した奇跡の谷. るるぶ屋久島奄美種子島 2011-2012: pp. 16-21. 引用は p. 20.
- (106)——看板撤去に至る経緯については, 屋久島森林生態系保全センターへの聞き取り調査より.
- (107)——JTB パブリッシング. 2011b. 前掲書. p. 21.
- (108)——例えば, ひげ長老(2006年版以降から掲載), くぐり<sup>つが</sup>母(2008年版以降から掲載)などの表記が地図上に加わった.
- (109)——柴崎茂光. 2005. 岐路に立った屋久島の観光. (森林環境2005. 森林文化協会) pp. 61-73.
- (110)——雑誌「旅」だけでなく, ワークショップなどからも無秩序な観光開発に対する島民の不満が吐露された. 例えば, 柴崎茂光・庄子康・柘植隆宏・土屋俊幸・永田信. 2007. 世界遺産管理における住民参加の可能性—鹿児島県屋久島の島民意向調査から探る— 地球環境, 13(1): pp. 71-80.
- (111)——Wang, Ning. 1999. Rethinking authenticity in tourism experience. *Annals of Tourism Research*, 26(2): pp. 349-370.
- (112)——Cohen, E., 1988. Authenticity and in commoditization tourism. *Annals of Tourism Research*, 15(3): pp. 371-386.
- (113)——日本語の表記に関しては, 以下の論文に従った. 田中祥司. 2013. 真正性の評価過程. 商学研究科紀要 77: pp. 91-103.
- (114)——皆上伸・柴崎茂光・愛甲哲也・柘植隆宏・庄子康・八巻一成・山本清龍. 2013. 十和田八幡平国立公園奥入瀬溪流におけるリスクマネジメントの現状と課題—利用者と管理者の視点から—. 林業経済研究, 59(3): pp. 10-20.
- (115)——なお本稿の一部は, JSPS科研 26570031, 16H04940の助成も受けて行った.

(国立歴史民俗博物館研究部)

(2017年12月12日受付, 2018年6月4日審査終了)

## Changes in the Promotional Images of Yakushima Island as a Tourist Site

SHIBASAKI Shigemitsu

This paper clarifies the chronological changes in promotional tourism images of Yakushima Island as a tourist site, designated as a world natural heritage site in 1993, using textual as well as visual information for photos published in Japanese travel guidebooks, such as “Tabi” and “Rurubu.” This study found that the images of Yakushima have changed across the ages. In the 1950s, Yakushima’s images emphasized its remoteness and local livelihoods, which were favored as tourism resources over its mountainous areas. Photos of hot springs and falls adjacent to the seashore were frequently picked up until the 1980s except for the age (around 1965) mountainous area of Yakushima Island was designated as a part of a National Park. After the 1990s, however, the main tourism resources in Yakushima shifted to the mountainous areas, such as Jomon-sugi Cedar and Shiratani-Unsuikyo. Recently, other tourism resources related to the ecotourism industry, such as Taiko-Iwa, known as Drum Rock, and Wilson’s stump, with its heart-shaped cavity, were newly exploited. These newly developed resources had a strong influence on changing images of Yakushima.

There are several reasons the images of Yakushima have shifted over time. In the early stages of tourism development, limited means of transportation to Yakushima Island and to its mountainous areas critically affected the production of tourism images. Development of infrastructure, such as an airport, roads, and footpaths, enabled visitors to Yakushima to venture into its mountainous areas, and articles in tourism magazines focusing on the mountainous areas gradually increased as a result. Disclosure of information about the mountainous areas led the penetration of mass tourism and the development of the ecotourism industry in Yakushima. With this increase in interest in the mountainous areas, publishers repeatedly updated their tourism magazines with newly found Yakushima information. However, the quick commodification of natural resources might cause conflicts, including issues of overuse and of alpine accidents. Public authorities must consider to what extent information about the mountainous region should be disclosed for the purpose of sustainable tourism development in Yakushima.

Key words: world heritage sites, values, media, tourism development, irreversibility, ecotourism